

●書学書道史学会

# 会報

## 第 18 号

平成21年(2009)12月10日発行

編集・発行  
書学書道史学会  
会報委員会

東京都渋谷区桜丘町29-35  
〒150-0031 美術新聞社内  
TEL(03)3462-5251(代)  
FAX(03)3464-8521(代)

### 第二十回書学書道史学会大会を終えて

鈴木 晴彦

去る十一月七日(土)、八日(日)の両日、記念すべき第二十回書学書道史学会大会を、所属の日本大学文理学部・百周年記念館で開催させていただいた。大きなミスやトラブルもなく、なんとか無事に閉会まで漕ぎ着けることができた。とりあえず「ひとまず安堵」というのが、開催校担当者の偽らざる本音である。

とはいって、両日の参加者は延べ三〇〇人を超える、参加者の実数も一九〇人を数えた。参加者動員数からいえば、第一回大会の東京大學・法文二号館での開催に迫る盛会となつた。開催校担当者としては、これに勝るご褒美はない。これも偏に、役員及び参加会員各位の理解と協力によつてなし得たことであり、この場を借りて謝意を申し上げる次第である。

以上のように総括的には盛会裏に終わった今大会ではあった。しかし、開催校担当者の立場からいえば、些細な反省点や懸念されたことがいくつか思い浮かぶ。以下、反省の意を込め、思いつくところをいささか記しておく。

まず、参加者動員数に直結する大会日程のことである。昨今の大學生試の多様化・多実施にともない、大会日程の設定は参加者増減の重要なファクターとなつてゐる。そこで、今回は開催日程の設定にあたつて、各大学の学祭シーズン終了直後の十一月初旬とした。しかし、それでも入試のために参加できなかつた会員がかなりいたようである。本学会大会は十一月開催が慣例化しているが、やはりこの大会日程については、今後も継続的な検討が必要となるろう。

つぎに、大会会場についてである。通常、開催校は開催年度の二年前に決定する。そこで、今回の場合は、会場とすべき本学百周年記念館の二階すべてのスペースを約一年半前に予約を入れた。その際他の行事とぶつからないことを祈つてゐた。しかし、運悪く同館一階で本学附属高校の進学説明会が行われることとなり、初日の七日は大変な混雑をきたした。急遽、本学会の受付を二階に移動した関係から、会員各位にはご迷惑をおかけした。

いずれにしても、校内共用施設である以上、こうしたトラブルは回避しがたい問題である。そこで、資金的に見合う公共施設があれば、今後は公共施設を積極的に大会会場として視野にいれてもよいのではないかと思う。もちろん、基本的には大学施設の利用がベストであろうが、過去には開催校の事情によつて公共施設を利用した例もあつた。とくに地方大学の開催などでは、学会にとつての過度な負担にならない限り、アクセスの観点からいつても、公共施設を会場とすることは大いに考えられる。

一方、今回の開催で最も懸念されたのは、新型インフルエンザの蔓延であつた。これまでの大会では、まったくあり得ない想定外の不安材料であつた。最悪の場合、開催中止もやむを得ないと考えていた。しかし、実際には、直接的な影響を受けることなく、全日程を無事に消化することができた。また、天候も気がかりなところであったが、これまた両日ともに穏やかな晴天に恵まれ、体感的にも申し分のない日和、杞憂に過ぎた。開催校担当者としては、天の采配に感謝しきりである。

(第20回大会運営委員長)

## 第20回大会研究発表・司会者報告

国内局・大会運営委員会

### ◆発表①豊坊篆書考—古篆書法を中心にして—

人部克典

本発表は、明代中期の能書家のひとり豊坊（一四九四～一五六九）による篆書体の作例二件について、字形上の典拠を調査することにより、その書法の特質を考察し、一方で、篆書に関する彼自身の言及をよりどころにして、特に「古篆」を重視した一因を探ろうとしたものである。

二件の作例とは、真跡とされる「篆書唐人詩四幅」（上海博物館蔵）と、鈔本の「篆書千字文」（宮城県図書館）であるが、この二件の作例に見られる文字について、いわゆる伝抄古文などとの比較対照を通して、統計処理を行い、ひとつの文字において説文篆文と古文が折衷されていることなどをはじめ、一定の結論を導き出している。また、「古篆」を重んじたことにについては、この体に習熟することがひろく書法に通ずるための要諦であるとの持論に根ざすものであるとしている。

発表後にフロアからの質問にもあつたことであるが、統計処理をすべく比較対照した資料の扱い方に問題があること、また作例のひとつ「篆書千字文」が先行する作例の臨本である可能性も考えられることから、これを豊坊の篆書の特質をさぐる主材料に加えること自体に疑念がのこと、などを問題点として指摘したい。

上記の諸問題の解決をふまえた価値ある研究成果があげられることを期待する。

（司会者・中村伸夫）



### ◆発表②元明の雑書卷冊の展開について

雄三

本発表では雑体書の性質を持つ書作品が、元代から明末清初にかけての卷・冊にみられて考察している。先行研究としては、白謙慎

「雑書卷冊和晩明文化生活」などがあり、それをふまえ、其の「混雜性」は明末清初の芸術の特色であり、明末文人の文化生活に根ざした物であることを考察しようとしている。具体的には元の趙孟頫、俞和、明の宋克、沈粲、沈度、

張弼、文徵明、祝允明、徐渭、明末清初の傅山、王鐸、八大山人などの作品を挙げて、元に始まり、明の宋克で芸術性へと目覚め、徐渭でそのピークに達し、明末清初で金石学の萌芽との兼ね合いで、篆隸書を交えた新たな段階に至るとまとめられた。此の流れは、元明の文学、音楽における雑劇の展開、明代絵画における花卉雑画の興隆と平行しているが、晋の韻、唐の法、

宋の意と展開した中国書法史の正統の流れは、正統からは外れる雑をも加えることによつて、更に豊かになつたと本発表では結論づけている

が、全体として、図版的資料の羅列に終始している面がある。論証するには資料の読み込みが必要であるが、本発表では漢文資料を読み込むと言つた。またその雑のピークに達するという徐渭についても、その必然性が説明しきれていないし、統計的資料のある扱いにも慎重さが要求されるとの質問にも今後は答えてゆく必要があるであろう。

（司会者・大野修作）



### ◆発表③宋四大家中の蔡端明—その選入をめぐつて—

津坂貢政

本発表は、蔡襄がなぜ「宋四大家」の一人に選ばれたのかを、従来とは異なる視点から考察しようとするものである。発表者は、従来の宋代書法史研究が「いま現在の我々の見地から、書人・作品・書論などについて検討を加え、書の歴史の中に系統づけてゆく」という立場をとるのに対し、「書人の人間性も含む人物像や、その人によって書かれた作品が、当時、あるいはその後の人々に見られ、受け取られていたのか」という受容史の視点が必要であるとする。従来の見解の多くが、蔡襄を「復古的傾向を帶びた書人の代表格」としてとらえるのに対し、彼の「士大夫としての評価」に着目すべきと主張し、蔡襄に対する歐陽脩、蘇軾の称賛、南宋

の朱熹による「理想的士大夫」としての位置づけとその評価の拡大が、蔡襄を「四大家」に選入させる大きな要因となつたと結論づける。文献資料を丹念に読み込んだ意欲的な発表であった。

確かに蔡襄に対する朱熹の評価が、朱子学の興隆にともなつて大きな影響力をもつたことは疑えないであろう。しかし、人物の評価のみを強調することは彼の作品そのものの価値を見落とすことになりはしないか。また、蔡襄が「宋四大家」へ選ばれた要因として発表者が強調する「理想的士大夫」という人物評価は、同一基準として他の三人（蘇軾・黄庭堅・米芾）にもそのまま適用できるのか。今後の更なる考察を期待したい。

（司会者・下野健児）

#### ◆発表④陳鴻壽の芸術と生涯 〈田淵元博〉

本発表は、①陳鴻壽の芸術家としての活動を三期に分けて概観し、②特に陳の隸書を取り上げ、そこに民間書法が受容される点を博文や曼生壺との比較から導くとともに、③彼の芸術の特質が、生活の芸術化・文化化を促進させたところに認められる点を、彼の閥歴も絡めつつ論証しようとするものである。

フロアーからは、論点が多岐にわたるので、絞り込みが必要であること、曼生壺登場以前の工芸を、民間芸術の側だけに結び付けることは、参考の余地があること、などの意見があつた。陳の書を、絵画や工芸なども含めた広い視野から検討することは、もとより重要であり、彼ら

の絵画にデュフィーとの接点を見たり、曼生壺の刻銘に彼の芸境を探ろうとする試みは、その一環として興味深い。ただし、それら諸芸が主役たる書のあり方と如何に具体的かつ固有の結び付きを見せるのか、更なる検討が必要と感じた。また発表では、素材としての詩句の意味と、造形・技法との関わりについて、カリカチュアとユーモアをキーワードに分析を試みられている点が示唆的であつたが、詩句の意味と切り離された視覚効果の次元で、ユーモアを感じさせる定着した表現がないか、この点の体系的・網羅的な検討も期待される。（司会者・菅野智明）

（司会者・菅野智明）

#### ◆発表⑤西周金文正字考—字体の多様性を中心として— 〈角田健一〉

西周時代の金文銘の文字は、概括的には、当時の正式字体（正体）で書かれた文字と考えられるが、後世のように一字に一つの字体が規範的に存在するとは言えない。

この状況に基づいて、字体の差異を判別する基準を五点（画数、配置、接点、反転、曲線）設定し、『商周青銅器銘文選』の示す銘文の時期区分と王期によって、四〇件以上の用例のある文字を抽出し、その字体を集計し検討したものである。

その結果、以下のことを指摘している。①字体が多様化する文字と変化の少ない文字があること、②多様化する文字には多様化のパターンがあること、③多様化する文字としない文字の特徴。④多様化のパターンは、早中期型、中期

型、変遷型、統一型に類別できること、⑤穆王、恭王時期に顯著に多様化が見られること。発表後の質疑において、データの集計に関して、王の在位期間の長短や所属資料件数への配慮、個々の銘文の属する王期が確定的でないものの配慮が指摘された。

これらの指摘事項はあるものの、西周時期金文の字体の様相について、おおよその傾向は把握できていると考えられる。指摘事項への対応や未検討資料への拡張などを通して、今後、いつそう研究が深まることを期待する。（司会者・浦野俊則）

（司会者・浦野俊則）

#### ◆発表⑥竹田画帖作品における著賛形式について— 〈亦復一楽帖〉の書と画による紙面構成を中心として— 〈吉村富美子〉

吉村富美子氏の発表は、絵画に付された賛についてその形式の成立にかかる問題を取り上げたものである。画賛の書については、「禅林画賛」といった水墨画の画賛の内容から研究書等はあるものの、筆跡そのものからの研究や筆跡と画賛とのかかわりについての研究がすくなかった。当日の発表では、画面の余白にあたるところへの文字の配置の仕方を分析し、いくつかの形式を指摘していた。発表後の質問で、形式の中でも、特殊な文字の散らし方などについては、内容の韻文と散文の違いと賛の形式のあり方の検討の必要性を指摘されていたが、確かにそれを視野に入れるべきであろう。また、賛を

No.18 / 2009. 12. 10

下田氏の発表は、清末民国初期を代表する書画收藏家である完顏景賢について検討を加えたものである。伝記の面では、これまで推測の域を出なかつた生卒年を、種々の伝記資料を駆使して確定するとともに、蘇宗仁の編纂にかかる『三虞堂書画目』を中心に、完顏景賢のコレクションの形成と散逸の経緯を、三期に分けて詳細に追跡した。

◆発表⑦完顔景賢の書画収蔵に関する一考察  
〈下田章平〉

発表を通じ、贊の始まり、その形式の發達史その他の基本的な事柄の研究、整理の必要性を感じた次第である。ただし、今後のこの分野の研究を進めるきっかけとなる発表として大きな意義を感じた。

する上の今までの常識も紹介され、画面の人物の顔の近くに贊の終りがたり、落款が顔の近くにくることはないのではないかとの指摘もあつた。これらに明快な解答を用意していくなかつたようであるが、それもこれから研究課題の一つにすぎない。確かによく言われることであるが、中には顔の側に贊の末尾があるものがあるが、中には顔の側に贊の末尾があるものがあつても不自然ではないものもあり、それらがいつ頃から成立したものかを含め研究対象の中にいれるべきであろう。

く評価される。

この発表に対し、(1)完顔景賢が書画の収藏をおこなった動機、(2)完顔景賢旧蔵品の日本への流出に関する資料の二点について質問が出された。(1)については、父祖の代からの収蔵品の継承と他の収蔵家との交流、とくに端方の存在が一つの大きな契機になつたのではないかとの回答であった。また(2)については、質問者から提示された文献は、概ね調査済みとの回答であり、この応答からも下田氏の発表が、広範な資料の探索にもとづく周到な用意のもとになされたものであることが察せられた。

今後、こうした地道な研究の蓄積によつて書画の収集・通伝にかかわった収蔵家たちの多様な実態が解明され、書道文化史研究の新たな地平が拓かれることを期待したい。

司会者・福田哲之

— — — — —

◆発表⑧古筆家伝来手鑑「輪墨林」とその痕跡

—古筆家正統の秘帖の行方— 〔中村健太郎〕

『一金鉄刀の表裏』、『柳家三助』、『源  
塩草』『見努世友』『輸墨城』の国宝手鑑三件が  
用いられてきた。しかし、鑑定の家職を継ぐ古  
筆本家・別家においては、これら以外にも複数  
の鑑定材料を所有していたであろう。本発表で  
は、手鑑『渝墨林』を取り上げて、鑑定の基準

三鉄『車長札』を取って、鑑定の基調をめぐる課題に言及しながら、本手鑑の実見調査によって得られた成果が報告された。

『輸墨林』は、所在および内容が不明な手鑑であるが、『昭和古筆名葉集』の編纂に用いら

(司会者・萱のり子)

本発表は、これまで多くの諸家より問題視されてきた鄧石如の楷書出自に焦点をあて、大きく全体論（作品）と各論（個々の文字）に分け考察を進めたものである。

右目点の一つは、古筆了伴による  
鑑定を証拠づける付札は、古筆の  
ものに付ける鍵であるものの、まだ古  
いほどには明確な研究対象として  
ない。付札に関する考察は、鑑定  
ものの意味や、古筆切と付札と  
いく上で、重要な視点といえる  
跡を同定するための書法分析の  
今後の検討課題となろう。  
「松永切」「龍田切」の書きぶり、  
見努世友との書体・書風の異  
の位置づけ、に関心が寄せられ  
（司会者・萱のり子）  
◆  
楷書考 〈鎌田美里〉

は、現在確認できる鄧の楷書作  
れまで多くの諸家より問題視さ  
れた。その楷書出自に焦点をあて、大き  
くと各論（個々の文字）に分け  
るのである。

遊歴の記録など）と照合するこ  
出自を試みた。本研究は文献の  
分析がまことに際立った。よつ

て鄧の行動と彼の周辺の事情が明確となり、諸説あつた先行研究を見直し、前期は主に六朝碑を、後期に至り北朝の要素を取り入れたことが確証をもつて指摘できた。また、鄧と梅鏐や畢沅が密に関係していたことも明らかとなつた。

次に各論では、「篆隸の体」の異体字に着目し、その使用例から鄧が確認したと推測される字書の検証を行つた。また、包世臣の「完白山人伝」の記述にある内容と合致する学書経緯を彼の作品の中に認めることが出来た。これらによつて、「篆隸の体」を用いた楷書作品の出自をほぼ解明できたと言えよう。

総じて本発表は、多方面から蒐集した文献資料による裏付けを基盤にしての考証であるため、鄧の書法分析において画期的な研究成果を提示することが出来たと考えられる。

フロアからは、全体的に分析や考察が精緻な研究であるとの好評を得た。そして、将来を期して、鄧の行草書作品に対する研究が彼の楷書作品考察に有用であるとの助言を受けた。今後の更なる研究の進展を期待するものである。

(司会者・池田利広)

#### ◆発表⑩沙孟海の書法に関する研究〈土屋明美〉

沙孟海（一九〇〇～九二、名は文若）は現代中国を代表する学者であり書家である。吳昌碩の弟子、西泠印社社長、浙江省博物館名誉館長として日本でも有名である。本発表はその書家としての一面に光をあて、世に「沙体」と称される作品の定義を行つた。方法論として「沙孟

海論書文集》等に見える書法に対する術語を踏まえながら、『沙孟海正行草書集』『沙孟海書法集』等を参照し、いかなる経緯を経て「沙体」が形成されたかを考察した。沙孟海が特に重視したのは「筆力」であり、「沙体」は一九五〇年以降（主に八〇年代以降）の、つよく（剛・健・雄）、意氣盛ん（氣・勢）な行草書体で書かれた条幅・扁額に見られる作品を指して称されると定義づけた。現代中国の書人というテーマと、美的術語（審美範疇語）を用いての検討という方法論は、新しい研究分野であり研究手法だけに、緻密な考察を重ね実証していくなければならない。その意味において意欲的な発表ではあるが、さらに伝来作品（書跡）の実眼を基本に精緻な作品分析を行い、正確な術語の読み解および作品との対応を考えねばならない。なお中国書法史上、顏体（顏真卿）、郭体（郭沫若）の如く「〇体」をもつて評する例があり、その場合には、広義（經典）と狭義（風格）の両面から考察する必要があると思われる。

(司会者・河内利治)

#### ◆発表⑪「和漢朗詠集」草手本と戊辰切巻上の書に関する考察〈山本まり子〉

『葦手本和漢朗詠集』と『戊辰切和漢朗詠集』卷上の筆者について、先行研究では諸説さまざまあつた。本発表はこの二本の古筆の筆者を明確にするため、両本の文字の字形の比較を縝密に行つた。その方法は二本の古筆の中での特徴が顕著に表れている同一の文字を抽出し、漢字

では文字の点画の方向の特性、同一の崩し方になる漢字の頻度を数えた。また仮名においては同一の字母の字形の比較や漢字と同様点画の方向の特性、例えば「な」字の第三画目の位置、結びの特徴、はらう線の方向や筆勢、字形の頻度など、綿密かつ多岐に亘つて分類整理し、比較検討を行つた。結果『葦手本』は筆勢があり、いきいきと流麗な流れで心の赴くまでに書かれているのに対し、「戊辰切」は単調な字形で重厚感があるが、動きが硬いことを突き止めた。従つて飯島春敬氏の「直ちに同筆とはいえない」という説や、小松茂美氏の「（戊辰切）上巻は伊行、下巻は定信」という説から一步踏み出し、『葦手本』と「戊辰切』巻上は、現段階では結論付けるまでには至つていらないものの、近似するが別筆という可能性が高いといふ論に至り、今後他方面からの詳細な研究が必要とされた。

これに対して、「時代の変遷の中で書風が変わっていくことも考慮すべき」という意見や「をみなへし」の扱いをどう考えるか、両者が近い関係の人間であったのではないか。また「用字」という言葉の扱いなどに質問が及んだ。

(司会者・杉浦妙子)

#### ◆発表⑫歐陽詢楷書四屏の書写意識に関する一考察—重出する同字の字体について—〈濱田尚史〉

初唐の三大家として有名な歐陽詢の楷書碑として確実なものに皇甫誕碑、化度寺碑、九成宮醴泉銘、溫彥博碑の四碑がある。濱田氏は先づ

四碑の重出する同字の比較を行い、その結果欧阳詢は、一碑一字体で貫いていることが解ったという。これを基準にして、近年注目される姚弁墓誌、竇娘子墓誌を分析した。前者はすでに顧鉄符氏の指摘があるように、字体使用の意識からも後世の作り物であると断定した。後者については、西林昭一先生は一見して欧阳詢風ではあるが、点画の起筆や「し」足などが異なり、結構に差があると指摘されている。これらについても同字比較の結果、それが裏付けられ、偽刻と判断した。

さらに欧阳詢と同時代の虞世南の孔子廟堂碑と褚遂良の孟法師との比較も試み、欧阳詢の文字意識について述べた。全体として、四碑の膨大な量の文字比較に裏打ちされた論で、説得力があり、四碑の用字意識から推して、姚弁墓誌や竇娘子墓誌は偽刻であると結論付け、堅実な論考である。

質疑応答では統計の取り方に問題があるとの指摘があった。また字体の概念規定に疑問があるとの意見も出た。なお、西林先生から姚弁墓誌に「書丹」という語があるが、喜平石経が初出の語であり、偽刻である。竇娘子墓誌も欧法の特徴である「不即不離」は認められるが、「し戈」などは欧法と異なると補足された。

(司会者・鶴田一雄)

また黄庭堅の跋が「なぜ大字で書かれたのか」という点についても、黄庭堅の跋中に見られる語句「於無仏處称尊」に注目し、両者の禅者としての意識を考慮しながら、新たな解釈を提示する。

本発表は、すでに評価の定まつた感のある名品をあえて取り上げ、如上の独特的の視座から改めてこれを論じようとする意欲的な試論であった。本論の核心にあたる語句の解釈等についても、口頭発表での質疑応答には限度があり、誌上で発表と検証を必要とする内容である。

(司会者・富田淳)

◆発表⑬「黄州寒食詩卷」の特質—筆跡と詩に見られる兩義性—〈鎌木洋保〉

「黄州寒食詩卷」は、蘇軾が黄州に流謫され

て三度目の寒食の節を迎えたおりに作った五言古詩二首を、行書で揮毫した書卷である。古くから蘇軾の傑作として世に喧伝され、黄庭堅の跋文が錦上花を添えて、名品の誉れが高い。

本発表は従来の作品研究には無い、新たな視点から標題作を取り上げるもので、「黄州寒食詩卷」の特質を、当時の蘇軾の心境や詩の内容との関連をも考慮して論じたものである。

発表者はまず「黄州寒食詩卷」の表現に着目し、「他の作品には見られない表現の大きな振幅」を指摘する。次にその要因を「詩の内容」と「書の味わい」の関係に求め、蘇軾の詩文中に用いられる「死灰吹不起」という語句、とりわけ「死灰」のイメージについて種々の用例を挙げながら、「黄州時代に顯著な禅への接近」という観点から新たに解釈することで説明しようとするとする。

また黄庭堅の跋が「なぜ大字で書かれたのか」という点についても、黄庭堅の跋中に見られる語句「於無仏處称尊」に注目し、両者の禅者としての意識を考慮しながら、新たな解釈を提示する。

◆発表⑭日本書道史における漢字散らし書き—伝藤原忠通筆詩卷切を例に—〈古谷稔〉

散らし書きは仮名独特の表現だが、僅かながら平安期の漢字書跡にも、これに倣つた例が散見される。本発表は、藤原公任筆の伝称があるものの藤原定信筆かとされる「詩書切本佚名佳句」など四点に、「和漢朗詠集」卷下「帝王」「丞相」「將軍」「行旅」から六篇の漢詩句が抄出揮毫された新出「詩卷切」一巻（仮称）も遺例に加え、その意義を考察したものである。

すなわち、①右記みな「和漢朗詠集」の揮毫といえ、朗詠との関わりが窺える、②金銀切箔・芒・砂子を撒いた霞引きの料紙が、十二世纪半ばの「戊辰切和漢朗詠集」に酷似する、③十五種二十字の漢字を藤原忠通（一〇九七—一六四）筆「勸学会記」（西新井大師總持寺藏・重文）と対照し、前項考察も含め、忠通筆とする宝暦十三年（一七六三）の九条尚実識語の妥当性が極めて高い、④貴族子弟の手習初めに用いられたと推察される、などの見解が提示された。

質疑では、「帝王」「將軍」等に関わる語を行頭に配する意図や、白隱の画賛など後世の事例の確認がなされた。司会者は、例示された藤原定信筆「大字和漢朗詠集切」現存断簡に、漢詩の散らし書きが見受けられないことを付言した。時間が限られ、料紙の幅が不揃いに継がれている点や、散らし書きの典型で十世紀後半書写説や小野道風筆者説もある「緋色紙」の年代を下げる事由などは伺えなかつた。論考挙筆を鶴首するものである。

(司会者・森岡隆)



## 第6回会員のための鑑賞セミナーのご案内

日時＝平成22年(2010)3月6日(土曜日)  
14:00～15:00(レクチャータイム)

1—6—1  
アクセス方法＝地下鉄東西線／早稲田駅下車

会津八一の作品を特別鑑賞ならびに同  
館学芸員による作品解説

場所＝早稲田大学・会津八一記念博物館レク

チャールーム(東京都新宿区西早稲田)

募集人数＝30名(定員をオーバーした場合は  
先着順で締め切ります)

申込受付開始＝平成22年1月10日(日)午前9時

### 『書学書道史研究』電子アーカイブ化に伴う著作権委譲に関する告知(お願い)

#### 会員ならびに著作権者各位

書学書道史学会(以下「本会」という)は、一九九一年の創刊以来引き続き学会誌『書学書道史研究』(以下「本誌」という)を刊行して参りました。このように長きにわたり本誌の刊行を継続して参ることが出来ましたのは、ひとえに会員各位のご支援、ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

さて、この度、本会は独立行政法人・科学技術振興機構(JST)の電子アーカイブ対象選定委員会により、本誌の創刊号以降の全号が、電子化しアーカイブ化される対象誌として選ばれました。この電子アーカイブとは、本誌の誌面を電子データ化し、同機関のインターネットウェブサイト上で公開されることをいいます。この電子データ化に当たっては、電子化された論文がすべて同機関の管理するサーバに保存されるため、その著作権が本会に帰属していることが条件となります。

従つて、本誌の電子アーカイブ化に当たっては著作権法により、本会が、掲載された論文などの著者からその著作権(複製権、公衆送信権を含む)の許諾または譲渡を受けている必要性が生じました。そこで本会ではすでに、本誌第19号から投稿規定中に掲載論文等の著作権の本会への帰属に係る諸規定を定めたところですが、同規定を定める以前に本誌に掲載された論文等につきましては、著作権の本会への委譲が明確でない状態となつております。

こうした事情から今般、電子アーカイブ化を進めるに当たり、本誌創刊号以来のすべての掲載論文等の著作権についても本会に帰属するものとさせていただきたく、本来であれば会員ならびに著作権者の皆様個々に「著作権の許諾手続き」を行うべきところではあります。また、諸般の事情にかんがみ、この告知(お願い)を以って著作権の譲渡につき、ご承認をお願い申し上げる次第です。なお、万一この件に関しましてご了承いただけない場合、

あるいはご不審の点がある場合は、二〇一〇年八月三十一日までに本会事務局宛、文書または電子メールでお申し出下さい。

また、本会ではこのお知らせが著作権者の皆様全ての目に触れる 것을前提としておりますが、何らかの事情でこの件をお知りになる機会がなかつた場合には、前記の期限を過ぎましても、改めて個別に対応させていただく所存でございます。特段のお申し出のない場合には、本件をご承認いただけたものとし、電子アーカイブとして公開する時期が参りました段階で、論文を所定サイトに掲載させていただく方針であります。公開後におきましても、会員ならびに著作権者の皆様からの掲載取り下げ等の要請がございました場合には、適切に対応させていただく方針でありますので、この段、合わせてお知らせ申し上げます。

以上

申込方法＝メールまたはFAX  
メールアドレス＝yokota@atom.ac.jp  
FAX＝048-478-3416(跡見学園女子大学人文学科研究室のFAX番号です)  
※メールもFAXも「鑑賞セミナー申込み」として、跡見学園女子大学／横田恭三宛にお送り下さい。

## 研究余話

## 万葉歌最古木簡の発見

森 岡 隆

学生時代、「つ」や「ツ」など字源に説の分かれる仮名があることや、シであるはずの「支」がキの仮名であることなどに关心をもち、「かなの字源に関する考察」と題する卒論にまとめた。国会図書館に日参し、江戸時代以降の仮名字源研究史を調査したことは、音韻と字形の両面から仮名の成立過程を考える機会となり、以後の研究への契機となつた。

その後も細々と調べてはいたが、平成五年以降、何度も仮名発達通史を執筆する機会があり、さらに深く知る必要を感じた。そこで同七年一月から、漢字伝来以降の歴史を書道月刊誌に連載し始めたが、法隆寺五重塔落書等の難波津の歌の遺例で渋滞。同歌の習書・落書が実に多く、出土も相次いだからだが、それらを検証するうちに、独自に発見した四点を含め、十世紀半ばまでの遺例を三十三点網羅するにいたつた。

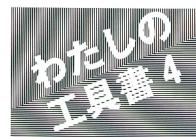
また、それらに記された拙い字や誤字、「ツ」や「尔」に見る左文字現象の指摘を通して、同歌を「手習ふ人の初めにもしける」と記した『古今和歌集』仮名序の記述を実証し得た。平成十一年の『書学書道史研究』九号所載「仮名発達史における難波津の歌」と、同十八年の十六号所載「手習い歌の変遷の実相について」で総括したとおりである。

一方、『古今集』成立以前の安積山の歌の実例は皆無であったため、真名序所載の富緒川の歌が、仮名序で安積山の歌に替えられたことも踏まえ、安積山の歌をも手習い歌としたのは、紀貫之かとされる仮名序作者の創作の可能性があると示唆。『日本・中国・朝鮮 書道史年表事典』の「法隆寺五重塔初層天井組木落書」項などで、仮説を述べていた。

が、平成二十年五月、滋賀県甲賀市宮町遺跡出土木簡の表裏に、難波津の歌と安積山の歌の上半を書いていたことが判明した。八世紀半ばの紫香楽宮跡とされる地から、同一筆者が両歌を書いたものが出現したのである。やはり両歌とも、当時から何らかの伝承があつたのである。ただ、名数として挙げられても、実態に軽重のあることはよく知られるところであり、仮名の習書も、実質は難波津の歌であつたと思われる。現時点における三十四例対一例という状況が、それを示していよう。

丹念に積み上げたはずの仮説は、提倡後七年ほどで取り下げるを得なくなつたが、他方、慮外の成果にも恵まれた。難波津の歌の最古例となる明日香村・石神遺跡出土木簡四点を調査中、同じく一字一音で記された万葉歌木簡を発見したのである。平成十八年の小著『國説かなの成り立ち事典』以降「留之良奈弥々麻久／阿佐奈伎爾伎也」と二行に刻された石神遺跡木簡を左行から読めば、ほぼ「朝なぎに来寄る白波見まく欲り吾はすれども風こそ寄せね」(『万葉集』卷七一三九二)の上半となることを指摘していたが、二年経て万葉歌最古の遺例として認知された。宮町木簡に墨書きされた安積山の歌も万葉歌で(卷十六一三八〇七)、解説順にかかわらず先に周知されていたが、石神木簡は七世紀後半に遡る最古例である。左文字で記された難波津の歌、左行から書かれた醍醐寺五重塔天井板落書や墨跡等に慣れていたことが幸いしたようである。

三十年前の卒論を契機とする仮名発達史への関心。それをつぶさに調べようとしたことから難波津の歌に関わり、十年余。同歌の遺例の発見はもちろん、『古今和歌集』仮名序の記述への言及、万葉歌最古木簡の発見など、当初は思いもしなかつたことばかりである。直線的に事を進めに越したことはないが、結論や成果を急がず、自身の充実に努めるうちに課題が見え、独自の道が開けることもあろう。これから調べを進める方への参考になればと、拙い探し方を語らせていただいた。



## 清末文人の日記

菅野 智明

日記に附載する索引は、一種の工具書といえようか。繆荃孫の『芸風老人日記』（北京大学出版社 一九八六）には、別冊として「人名索引」「書名索引」が備わり、辞典代わりに使ってしまう。翁同龢の『翁同龢日記排印本』（趙中孚編 成文出版社 一九七〇～七九）にも、「人名索引」「地名索引」が附す。ただし、翁の日記は、『近代人物日記叢書』版（陳義傑整理 中華書局 一〇〇六）にあたるべきで、この点は既に中村伸夫氏が触れている（『中国近代の書人たち』「翁同龢」二玄社 二〇〇〇）。

金梁輯『近世人物志』（民国二三年排印本→『近代中国史料叢刊統編』第六八輯）は、上記の翁同龢に加え、李慈鉉、王闔運、葉昌熾の日記から、名士の記事を人物単位に抄録・編集したものである。摘録であり、十全ではないが、この著がもたらす恩恵は大きい。

この著を手がかりに、原典にあたることになる。種々の版がある李慈銘の日記では、『越縵堂日記』（文海出版社 一九六三→広陵書社 二〇〇四）の筆写影印本が完備している。因みに、上記の金梁は、『近世人物志』とは別に、李の日記に記される学術書・學術記事を中心に『越縵堂日記索引』（『近代中国史料叢刊統編』第六〇輯）を編んでいるが、いさか粗略の感がある。

日記は、單行本化せず、個人の文集や資料集に収められることがある。

劉鶚の日記は、劉德隆等編『劉鶚及老殘游記資料』（四川人民出版社 一九八五）に収録され、羅振玉の一時帰国日記「五十日夢痕錄」（これは民国四年の日記だが）は、『雪堂叢刻』（上虞羅氏排印本→『羅雪堂先生全集』三編再収）に収められる。上記拙著の第二章では、劉・羅の日記を活用した例がある。あわせて参照されたい。

それにしても、これら近人の日記から窺える彼らの一日一日は、濃密で眩い。対して、稿者自身のスカスカな日々は何ともやりきれなく、今ひとつ日記を書く気になれない所以も、こんなところにある。

王闔運の『湘綺樓日記』は岳麓書社の点校本が、葉昌熾の『緣督廬日

記』は江蘇古籍出版社の筆写影印本が出ており、これらが使える。かつて、王・葉の日記は、ともに『中国史学叢書』（台湾学生書局）が翻刻していた。

## 総会・理事会報告

## 事務局

平成20年度会計決算報告書			平成21年度予算案		
	項目	金額		項目	金額
収入の部	個人会員会費	2,527,000	収入の部	個人会員会費	2,346,000
	団体賛助会員会費	750,000		団体賛助会費	600,000
	その他の収入	576,600		その他の収入	600,000
	前年度繰越金	5,628,639		前年度繰越金	5,735,839
	合計	9,482,239		合計	9,281,839
支出之部	編集局学会誌関係費	1,086,760	支出之部	編集局学会誌関係費	1,200,000
	事典等編纂改訂関係費	0		会報委員会経費	300,000
	会報委員会経費	190,700		国際局経費	300,000
	国際局経費	0		国内局経費	600,000
	国内局経費	388,022		学術研究局経費	200,000
	学術研究局経費	0		20周年事業特別会計	400,000
	研究局経費	10,800		20周年事業特別会計	2,000,000
	20周年事業特別会計	1,000,000		事務局関係費	200,000
	事務局関係費	0		謝会金	300,000
	謝会金	0		議会通信費	400,000
	会議費	214,466		送交費	300,000
	通信費	207,480		普及広報費	100,000
	交通費	163,810		ホームページ費	200,000
	普及広報費	81,300		印刷費	500,000
	ホームページ費	105,000		事務消耗品費	200,000
	印刷費	0		事務管理費	200,000
	事務消耗品費	61,262		人件費	200,000
	事務管理費	200,000		備	1,681,639
	人件費	36,800		合計	9,281,839
	繰越金	5,735,839		合計	9,281,839
	合計	9,482,239		合計	9,281,839

## ◆2009年度総会ひらく

去る11月7・8の両日、日本大学文理学部・百周年記念館で開催された「第20回(2009)大会」の冒頭、例年通り本年度総会が開催されました。総会は、富田淳常任理事の司会で、まず横田恭三内閣長の開会の辞、古谷稔理事長の挨拶に続いて、大野修作理事を議長に選出して議事に入り、

▽20年度事業報告・会計報告(萱原晋事務局長)

▽監査所見(浦野俊則監事)

▽編集局報告(中村伸夫局長)

▽学術局報告(森岡隆局長)

▽国際局報告(河内利治局長)

▽国内局報告(横田国内局長)

▽研究局報告(鈴木晴彦局長)

▽会報編集委員会報告(柿木原くみ委員長)

▽21年度事業計画・予算案説明(萱原事務局長)

などの各議案・報告等をいずれも満場一致で承認・可決しすべての議事を終えました。

この中では特に、本学会会誌のバックナンバーが創刊号から全て、文部科学省所管の独立行政法人・科学技術振興機構(JST)による国内学協会の学術雑誌の国際発信力強化と重要な知的財産保有を目的とする「電子アーカイブ事業」の対象誌に選ばれ、同JSTが運用しているJournal@rchiveサイト(<http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/>)にて公開されることが決まった旨と、そのためには本学会会誌では創刊号に遡つて全ての掲載論文の著作権について、論文等の著者から譲渡を受ける必要がある旨が報告され、承認されました。またこのため、学会誌の投稿規定中に所要の記載を盛り込むとともに、『会報』本号において会員・著者に対する告知を行う方針が報告されました。

## 談話室

## 曾国荃臨・争坐位帖を鑑賞して

井後尚久

今回、澄懷堂美術館の秋展では「翰墨の縁—贈答・合璧の書画」という企画で展覧した。

その中の一つに、曾国荃（一八二四—一八九〇）が蘭生という人物に顔真卿の「争坐位帖」の一部を書き送った作品がある。この作品の用筆法は顔法であるが、全て単体で書かれている。たぶんこの作品は顔真卿の作品の臨書

作品を蘭生送るのが目的ではなく、「争坐位帖」の文章の中で、曾国荃自身が気に入っている箇所を墨書して与えたのではないだろうか。もしそうなら、書の臨書とは、法帖の文章も理解して学ぶものかもしれない。

## リアルな出会い

田中之博

美術館を辞し地元の郷土資料館の芸員となつて、既に一年半が過ぎた。

跡を実見する機会は減り、調査の対象も地元に残る地方文書に大きくシフトした。それでもたまに、庄屋の末裔に受け継がれてきた古筆類に遭遇して胸躍ることもある。先般、何気なく訪れ

た近隣の民俗郷土資料館で、雑然と並んだ民俗資料に紛れて、照明焼けした古筆手鑑が展示されているのを目にして

た。古筆家の極札を伴い、装幀もなかなか立派だ。館の方に尋ねたが興味もないようで何も情報は得られず、次回調査させていただくことをお願いして館をあとにした。今の私にとって古筆との出会いは、まさに偶然のリアルさを伴つていて。

## 古写経をめぐつて

橋本貴朗

従来、日本に伝存する古写経は、書道史上に大きな位置を占めながらも、長巻にわたる全容の紹介・出版が困難なためもある。その研究は必ずしも盛んとは言い難いよう

に思われます。

しかし仏教学では近年、古写経の重要性が喚起され、その本文は刊本以前の古態を有していることが明らかとなつてきています。これを受け、筆者の勤務する国際仏教学大学院大学学術フロンティアでは、平安・鎌倉時代書写の一切経のデジタル画像の集積を進め、

◆群馬県千代田町の亀田鵬齋研究会が、創立十周年を迎えた。9月の記念行事では、遺墨展のほかに鵬齋の大字楷書の六曲一双屏風の前で落語「鵬齋とおでん屋」が演じられた。また、恒例の鵬齋の八木節が披露されて盛大で

あった。

◆日頃、学生に接する仕事をしているが、家計の困窮を理由に休学する学生が増えているようだ。書を学ぶ学生を対象とした奨学基金のようなものができるに違いないだろうか。

（石井 健）

## 新入会員（H21・8～21・11）

- 菅野裕子（S40年）高校教諭  
○内海友香理（S62年）  
○（学）緑川明憲（S53年）

## 編集後記

順次CD-R版が刊行中の正倉院聖語藏の奈良朝写経とあわせて、これらを用いた新たな展開が期待されます。

## 21年度活動事業日程表

4月19日	常任理事会会議（於本部）
5月10日	会報委・編集会議（於本部）
6月1日	《会報》第17号発行
7月5日	第5回研究発表会 (於跡見学園女子大・文京キャンパス)
7月9日	編集局編集会議（於本部）
7月21日	第20回大会発表申込締切り
7月24日	第46回臨時理事会（於渋谷）
8月1日	第20回大会運営委現地調査
9月10日	編集局編集会議（於本部）
9月30日	学会誌19号発行
10月5日	「大会レジュメ集」発行
11月7日	第47回定期理事会
11月7、8日	第20回記念大会・記念式典 (於日大文理・百周年記念館)
11月18日	会報委・編集会議（於本部）
11月27日	20周年記念論文集編集委（於本部）
12月10日	「会員名簿／2009」発行
12月10日	《会報》第18号発行
12月31日	学会誌20号投稿申込締切り
2月中旬	常任理事会会議（於本部）
2月15日	第11期役員改選選挙告示
3月6日	第6回鑑賞セミナー (於早稲田大学八一記念博物館)
3月7日	第11期役員改選投票締切り
3月8日	第11期役員改選選挙開票
3月14日	第11期選挙当選理事緊急懇談会
3月31日	第48回臨時理事会会議（新旧）
3月31日	学会誌20号投稿原稿締切り

す。  
しかし仏教学では近年、古写経の重要性が喚起され、その本文は刊本以前の古態を有していることが明らかとなつてきています。これが受けて、筆者の勤務する国際仏教学大学院大学学術フロンティアでは、平安・鎌倉時代書写の一切経のデジタル画像の集積を進め、

◆十一月一日、紅葉の山々に囲まれ犀川のダム湖・琅鈞湖（生馬の命名）に面した有島生馬記念館を訪ねた。有島三兄弟を偲び、静かな実りの多い小半天を過ごした。（紫）